

万国博覧会と作品出品者

（焼き物（陶磁器や七宝焼）に携わった人々を中心に）

松田千晴

一 はじめに

欧米列強の軍事的圧力によって開国を余儀なくされた日本は、欧米先進国の科学技術力を目の当たりにし、富国強兵を図って植民地化の波をはね返そうとした。

富国強兵の重要な柱となったのが欧米先進国の生産技術の導入と日本からの輸出振興による殖産興業政策であり、政策推進の起爆剤となったのが欧米先進国で開催された万国博覧会や国内で開催された内国勸業博覧会などであったことは、先学（註1）によって明らかにされてきた。

本稿においては、将来的に重要な輸出品になり得ると明治政府が判断した焼き物（陶磁器や七宝焼）を出品した人々の側に立ち、万国博覧会が出品者にとってどのような意味を持っていたのかということや当時の記録などから見ていきたいと考える。

二 万国博覧会の誕生と明治政府の立場

英国で始まった産業革命は大量生産時代を到来させ、欧米先進国をして産業革命以前に各国が保有していた国あるいは一定の地域以上の広大な市場を新たに必要としてきた。

その結果、全世界の情報（工業文明が生み出した技術とその成果）を一堂に紹介する大規模な展覧会が、圧倒的な工業力をもつ英国において企画・実施されることになった。それが、嘉永四年（一八五二）の第一回ロンドン万国博覧会（正式名称は「万国の産業の成果の大博覧会」）である（註2）。

以後、「表1 明治時代に開催された主な博覧会と日本の対応」からも分かるように、規模の大小はあるものの欧米を中心として毎年のように万国博覧会などが開催されるようになる。この万国博覧会というものの意義をいち早く理解し日本に紹介したのは、徳川幕府による文久二年（一八六二）の竹内遣欧使節団の一員として第二回ロンドン万国博覧会を目の当たりにした福沢諭吉が慶応二年（一八六六）に出版した『西洋事情』であった。

また、明治政府自体も、万国博覧会を文明開化の延長線上にあるという観点（長期的視野）、及び貿易立国をめざす日本にとって絶好の売り込みの機会であるという観点（短期的視野）からとらえた。そして、長期的視野に立つて欧米で開催される万国博覧会になん度も調査団を派遣するとともに、短期的視野に立つて万国博覧会場に日本館を特設したり日本文化の独自性が色濃く表れた工芸品を出品したりして販売促進を図った（註3）。

三 焼き物の万国博覧会への参加状況

それでは、出品者側はどのように対応したのであるか。焼き物関係の出品者の動向を中心に、主な万国博覧会との関わりの中で見ていくことにする。

（1） 第二回パリ万国博覧会

日本が万国博覧会に公式参加したのは、慶応三年（一八六七）の第二回パリ万国博覧会が最初である。このとき日本から出品されたのは、陶磁器や漆器・金細工・銅器・甲冑刀槍・浮世絵から和紙・材木・鉱物にいたる特産品であった。

陶磁器は漆器などとともに伝統的な特産品の一つとして扱われていたが、特別な位置づけをしようという意図はなかったようである。

（2） ウィーン万国博覧会

明治政府が初めて万国博覧会に参加したのは、明治六年（一八七三）のウィーン万国博覧会であった。奥国（オーストリア）政府から正式に参加要請

を受けた明治政府は大隈重信・寺島宗則・井上馨を博覧会事務取扱に任命し（事務局の総勢一一一名）、お雇い外国人ワグネル（ドイツ人）の指導助言のもと参加準備に入った。

明治政府は同万国博覧会への参加意義を、欧米先進国の優れた工業技術を学ぶこと、及び世界に日本製品（生糸・蚕卵紙・茶・和紙・陶磁器・漆器など）の優秀さを知らしめることにあるとし、一年余の準備期間をもって日本文化を体系的に紹介できる出品内容とした結果、日本から万国博覧会場に持ち込まれた伝統的工芸品である織物・漆器・銅器・陶磁器・七宝（しっぽう）焼（註4）・象牙細工・鼈甲（べっこう）細工・革細工などは大変な人気を博し、入場者はもちろんのこと各国の博物館も意識的に資料収集を行った。

同万国博覧会に参加するにあたって、博覧会事務局副総裁に任じられた佐野常民はやがて重要な輸出品になるであろう陶磁器に特別の配慮を払い、「陶器絵付に関しては東京府下の本業者十有余名に命じ花瓶に新規の画を描かしめたる」（註5）

とあるように、日本絵画のように質の高い上絵付を目的とした博覧会事務局付属陶磁製造所を明治五年に設立（責任者は後に瓢池園を設立する河原徳立とくりゆう）している。また、同万国博覧会に出品された陶磁器が、「陶器は名におふ伊万里焼、京の清水粟田焼、美濃の岐阜焼、尾張焼、加賀の九谷のうるはしき又は薩摩の風雅なる万古の土瓶、淡路の焼物」（註6）という記述から美濃焼・瀬戸焼・九谷焼・京焼・有田焼・薩摩焼などであったことが分かる。

ちなみに、陶磁器部門及び七宝焼部門において、次のような入賞（註7）が見られた。

【名誉賞】

肥前有田 陶器製造所

【進歩賞牌】

【有功賞牌】

愛知県
愛知県（七宝焼）
鹿児島県

【表状】

勸業寮
長崎県
京都栗田五条坂の陶工
淡路の工人加集三平
三重県
石川県
岐阜県の工人万助

【協賛賞牌】

愛知県の川本枅吉

ただし、岐阜県の工人万助については、前掲の記述から美濃国の人であろうということだけは推測できるものの詳細は不明である。

ところで、同万国博覧会への日本からの派遣団は七二名におよび、欧州先進国において先端技術の習得にあたっている。陶磁器について見ると、このとき日本に導入された先端技術の一つが、石膏（せっこう）による鑄型成形法であった。この技法には、石膏の状態さえ同じであれば、透き通るほど厚みの薄い均質の器形の量産が可能という特色があった（註8）。ちなみに、美濃窯（よう）において最初にこの技法を取り入れたのは、美術工芸品の量産で知られる西浦焼の西浦円治（土岐郡多治見村）であった（註9）。

（3）アメリカ独立百年万国博覧会

次いで明治政府が参加したのは、明治九年（一八七六）に米国フィラデルフィアで開催されたアメリカ独立百年万国博覧会である。明治政府は商工業

の発展に直接役立たせることを強く意識し、最高責任者に大久保利通と西郷従道をいただいでワグネルの指導助言のもと参加準備に入った。

その結果、陶器部門では横浜の宮川香山（みやがわ こうざん 京都粟田口に生まれ明治四年に輸出用陶磁器制作の真葛焼を横浜に開窯 明治二九年に帝室技芸員）をはじめ薩摩焼と万古焼から一名ずつ、磁器部門では有田から深川栄左衛門（明治九年に香蘭社を創設）他二名・京都から乾山伝七（かみざん でんひち 尾張国瀬戸に生まれ京都に移って磁器を制作）・和気亀亭（わけ きてい 染付にはじまり京薩摩を制作）・永楽善五郎（えいらく ぜんごろう 京焼の本流を歩みながら色絵付などにも力量を發揮）・加賀国から田中孫平他三名・東京の瓢池園（ひょうちえん）・瀬戸の川本柝吉（かわもと ますきち 瀬戸窯における最初の輸出用磁器を制作）・川本半助（輸出用染付磁器を制作）が、七宝部門では名古屋の七宝会社が入賞している（註10）。

ところで、同万国博覧会への出品類別（註11）を見ると、陶磁器や七宝焼（薩摩・淡路・太田陶器花瓶類、万古・美濃・東京・三河・有田・粟田・清水・永楽・九谷・七宝・瀬戸・唐津焼他）は製造物の中に類別され、まだ美術（彫像・書・彫刻・石版・写真など）の部類には入れられていなかったことが分かる。

（4） 第三回パリ万国博覧会

明治十一年（一八七八）の第三回パリ万国博覧会の場合は、輸出拡大の絶好の機会ととらえた明治政府が、民間からの参加を積極的に呼びかけた。

参加者の中には、国策会社である三井物産やウィーン万国博覧会の翌年に佐野常民の斡旋で誕生した貿易会社「起立工商会社」（きりうこうしょう 取扱い品目は農産物と美術工芸品）・佐賀県有田の香蘭社（こうらん アメリカ独立百年万国博覧会参加を機に明治九年に設立された輸出用磁器製造会社）・七宝会社（名工竹内忠兵衛をはじめ多くの工人を擁して明治四年に名

古屋に設立された七宝焼の製造販売を目的とする会社）・瓢池園（ウィーン万国博覧会事務局付属陶磁器製造所の解散を受けて明治六年に東京に誕生した輸出用磁器の上絵付専門工場）や宮川香山代理人など（註12）陶磁器及び七宝焼に関わりのある会社名や作家名が見られる。

日本からの出品物は同万国博覧会に驚きをもって迎えられ、高い評価を得た。特に陶磁器や七宝焼に関しては、次に一覽（註13）をもって紹介するが、「陶磁器は出品点数最も多く審査評亦区々たり、中に在りて有田香蘭社出品は充実精巧、愛知七宝会社出品は堅実低廉、神奈川香山社出品は形奇古にして雅致に富み東京瓢池園の画は風采宜しく何れも金賞牌を勝ち得たり。其他銅牌賞状等総て二十六個を得たる」（註14）というような高い評価を得ていた。

しかし、同時に、「欧州向きとして只管外国風を模し却って日本固有の雅致を失ひたるものあるは警戒すべし」（註15）

との批評は後の陶磁器・七宝焼業界の姿を暗示するものであった。また、明治に入って輸出を目的に設立された七宝会社や瓢池園・香蘭社などの作品が金賞を受賞し、伝統的な京焼の名工として名を馳せていた永楽善五郎や清水六兵衛（きよみず ろくべえ）・高橋道八（たかはし どうはち）が銅牌に終わったことについても、日本の美術工芸界としては今一度立ち止まって考えなければならない点（註16）であった。

【名誉賞状】

金賞牌の部

東京府下 瓢池園（明治六年東京に設立）

神奈川県下 宮川 香山（初代・京都に生まれ明治四年から

薩摩風の輸出用陶磁器を横浜で制作）

愛知県下 七宝会社（明治四年名古屋に設立）

佐賀県下 香 蘭 社（明治九年有田に設立）

銀牌の部

京都府下 乾山 伝七（瀬戸に生まれて京都に移り皇室御

用品を制作）

丹山 青海（たんざん せいかい）

石川県下

田中 孫平（金沢の九谷焼の輸出商）

鹿児島県下

柿本彦左衛門

銅牌の部

熊本県庁

京都府下

永楽善五郎（西村家一四代・明治三年に家督を

継いで茶道具を制作）

和氣 亀亭（四代）

清水六兵衛（四代・輸出用陶器を制作）

〃

高橋 道八（四代・京都栗田口の名門で優美な

京焼を制作）

愛知県下

加藤勘四郎

〃

川本 枅吉（初代・瀬戸で輸出用の染付を制作

し「瀬戸磁工社」と「磁工社」を瀬戸と東京に設

立）

〃

加藤李左衛門（二代・「李兵衛」あるいは「陶

楽園」と号して瀬戸で輸出用磁器を工場生産）

〃

川本 半助（六代・瀬戸で輸出用染付などを制

作し「瀬戸磁工社」を設立）

岐阜県下

加藤 吾助（明治初期に西浦焼の製造主任とな

り同一一年頃に独立して染付を制作）

〃

清水 温古

三重県下

谷 スミ

石川県下

河部 碧海（明治二年に九谷焼の輸出用陶磁器

工場を金沢に設立）

賞状の部

長崎県庁

東京府下

松本 芳延

〃

太田 万吉

〃

樋口八十吉

〃

青木 虎吉

京都府下

清水七兵衛

愛知県下

山田 茂七

〃

加藤紋右衛門（六代・「還情園」あるいは「池

紋」と号して磁器を制作）

〃

秋山 貞次

三重県下

高木 閑斎

〃

森与五左衛門

石川県下

笹田 蔵二

ところで、同万国博覧会において、粗悪品の代表のごとき評価を下されていた美濃窯で磁器の制作に携わっていた加藤吾助（加藤五輔）の「富士山を描いた花瓶」（註17）が京焼の名工たちとともに銅牌を受賞したことは、美濃窯はもちろんのこと、全国の陶磁器関係者に驚きをもって伝わったのではないだろうか。なにはともあれ、この受賞は美濃窯の関係者の自信につながるとともに、美濃窯の面目躍如となったことであろう。

(5) シドニー万国博覧会

明治一二年（一八七九）に豪州シドニーで開催された万国博覧会には、小規模万国博覧会であったにもかかわらず官費（七名）及び私費（四名）の出

品関係者が派遣された。官費の中には宮川香山や西浦円治（岐阜県当局から出品者総代に任せられる）の代理人を含み、私費としては三井物産や起立工商会社が参加していた（註18）。

ちなみに、同万国博覧会において西浦円治の出品した西浦焼は特賞賞及び銅牌を受賞している（註19）。

(6) コロンブス大陸発見四〇〇年記念万国博覧会

明治二六年（一八九三）に米国シカゴで開催されたコロンブス大陸発見四〇〇年記念万国博覧会に対しても、明治政府は積極的に参加した。その背景には、当時の日本がすでに輸出型の産業構造を構築しつつあり、米国そのものが日本にとっては主要輸出国になりつつあったという事情が存在した。輸出振興を目指す明治政府は、厳選された美術工芸品をはじめ一六、五〇〇点もの出品を敢行したのである（註20）。

日本の出品状況については、
「本博覧会に於ける本邦の出品は其数量に於て前例なく且つ我国の文物制度より生産製造の各方面に互る豊富なる出品を試み産業国としての真価を發揮するに至りたり、而して本邦出品区中最も重要なるは工芸部にして工芸館内日本部は英、仏、独、奥、白、瑞西等の主要賛同国間に介在して平和の競争に当れるものにして陶磁器、七宝、金属器、絹織物、漆器、家具類及木材彫刻品等を陳列せり。陶器中絵付物は其声価昔日の如くならず染付本窯物、無地物等渾べて滴洒淡泊なるもの時好に適し需要多く、七宝は大作物よりは小型軽便且つ実用向きのもの趣好に投ぜり、金属器類は概して観客の注意を逸せり」（註21）

という記述から、焼き物が入場者の注目を集め売れ行きも好調であったことが伺われるが、それとともに焼き物に対する購買層の趣向が変化し始めているようにも見受けられる。

陶磁器類は主として工芸館に展示されたが、真葛香山（宮川香山）の「龍

に青梅波花瓶」や竹本隼太の作品については、仏国セーブル窯の作品などとともに美術館に展示されて好評を博したとある（註22）ことから、芸術性が高いという国内の評価に基づいて別格扱いになっていたようである。

ちなみに同博覧会への出品物の中には、美濃国恵那郡茄子川（なすびがわ）村に生まれ、東京に出て薩摩風細密画の作品制作で名を馳せた成瀬誠志（なせ せいし）の作品も含まれていた。郷里（現中津川市内）に戻った成瀬誠志は、同万国博覧会への出品を意図し全精力を傾注して「日光陽明門」なる作品を制作した。しかし、運搬途中の荷崩れによって破損したため、破損を免れた屋根の部分のみを出品したにもかかわらず、多くの美術家から賞賛されて工芸一等賞を受賞したのであった（註23）。

(7) 第五回パリ万国博覧会

明治三十三年（一九〇〇）の第五回パリ万国博覧会に対しても、明治政府は積極的な参加方針をもって臨んだ。出品は将来の国際競争に耐え得るものとし、一般の製品についてはすでに貿易品としての地位を確立しているものか将来貿易品として有望なものを、美術品については日本古来の伝統に基づいたものを選定した。国内最高の芸術家と目された人々に対しては、当時すでに帝室技芸員（明治二三年に美術の保護奨励策の一つとして美術家を優遇するために設けられた制度）の称号が与えられていたが、彼らの作品もまた同万国博覧会出品のために買い上げられていった（註24）。

陶磁器や七宝焼が含まれる美術工芸品については、
「優等工芸品は美術を応用し制作良好にして観賞実用其宜しきを得たるもの」（註25）

と位置づけるとともに、出品物の選定にあたっては、

「美術工芸品は本邦出品中の精華たり、されば芸術に於ては欧米に冠たるの名譽を荷へる巴里府に於て列国の競争に加はらんとせば、特に優秀卓絶の出品なかるべからず」（註26）

という姿勢で臨み、 畝

「普通出品に一段の光彩を加へん」(註27)と意図していたのである。

ところが、日本からの出品が明治政府の主導で厳密に行われたにもかかわらず、

「漆器、銅器、金銀器、陶磁器、七宝、象牙細工、玩具、花筵、監籠等の出品は一般に制作の緻密精巧を認められたるも意匠と実用との点に至りては往々非難を免れざるものあり。

中に在りて陶磁器出品は一般に好評を得、殊に宮川香山の出品に至りては彩色の濃淡配合間然する所なしといふべく、香蘭社、錦光山、清風、数明山等の出品亦頗る好評あり、

(中略)
金銀器、七宝等に在りては濤川惣助の花鉢、川崎正蔵の七宝大花瓶等完全なる大作とせられたり」(註28)

とあるように、陶磁器や七宝焼などについては形態や文様が類型化していたり機能が十分に考慮されていなかったりしたこと、すでに欧米諸国に知れ渡っていたオール・ヌーヴォー様式の模倣作品が数多く見られたこと、値段が高すぎたこと(「日本値段」といわれた)などから、同万国博覧会場では日本からの出品に対して批判が続出した。ただし、宮川香山・加藤友太郎(かとう ともたろう 瀬戸に生まれ上京して井上良斎やワグネルに師事)・錦光山宗兵衛(きんこうざん そうべい 京都の錦光山家七代目として生まれ京薩摩を制作)・清風与平(せいふう よへい 兵庫県の円山派の次男に生まれ京都の名門清風家の養子となって陶芸を学ぶなかから純日本的な作風を確立して明治二六年に陶芸界最初の帝室技芸員)たちによる作品(陶磁器)や濤川惣助(なみかわ そうすけ 東京で七宝制作に携わる中で日本的な作風を追求し無線七宝の技法を完成して明治二九年に帝室技芸員)・並河靖

之(なみかわ やすゆき 繊細巧緻かつ華やかな作風を追求し明治二九年に帝室技芸員)・安藤重兵衛たちの作品(七宝焼)については、万国博覧会の審査員達から絶賛を博している(註29)。

四 出品者から見た万国博覧会

出品を願う人(あるいは会社)にとって、万国博覧会はどのような意味をもっていたのであろうか。

アメリカ独立百年万国博覧会における「出品者心得」には、次のような項目が見られる。

「一 又出品するに二種の心得あり其一は飽迄美良精好にして便宜を極めたる物品なり是物品精粗適否の吟味にして賞牌を得せしめ美名を海外迄輝かす為めなり」(註30)

「一 品主にて彼国に至らず本局に託して出品する者は本局にて物品持帰り販売の後売残り候節は持帰る欺糶売に出す欺其品主の存意に任すべければ若し糶売に出さば凡何割引迄は差支なし等の情実委細可申出置事」(註31)

この二つの項目から、万国博覧会は個人(例えば宮川香山や並河靖之など)や工房(例えば西浦焼や七宝会社など)・取扱い商社(例えば起立工商会社)にとって作品発表の絶好の場(長期的視野)であるとともに作品販売の場(短期的視野)であったことが分かる。

ウィーン万国博覧会を例にとると、現地では日本の出品物に対して、「各国の品の内見物人の最も多く集ひ来るは日本の品なり、陶器、漆器、寄せ木細工の如きは欧羅巴にては最も珍らしく美しとするものなればなり、支那の品にもよきものありと雖日本の右に出ること能はざるべし」(註32)といった評価が寄せられ、欧米には見られない東洋趣味の出品物の中でも日本の物が群を抜いていたことから、順調な売れ行きを見せていたようである。

それでも残った物については、随行した商人に命じてウィーンで売りさばせた(註33)。

第三回パリ万国博覧会(明治政府の参加経費は二万三千元)を例にとると、同万国博覧会においては巨額の売り上げ(三三万七千円余)が見られた。品種別に見ると、陶磁器関係の売り上げが最も多く、次いで金銀銅器・漆器・小間物・織物となっている。また、出品者に目を向けると、七宝会社や円中孫平(九谷焼)・起立工商会社・香蘭社・三井物産・太田万吉(東京府)・京都府・宮川香山・瓢池園・柿本彦左衛門(薩摩焼)が上位一四名の中に見られる(註34)。

ちなみに、柿本彦左衛門の場合は蓋物・茶碗・菓子器・箸置・水注・皿・砂糖入・乳入などを出品するとともに、彦左衛門自身も渡航して銀牌を直接受賞し、七四八〇フランの売り上げを得ている(註35)。

しかし、相手国の経済状況や日本趣味の減退によって、巨額の費用を投入したにもかかわらず日本からの出品物が期待通りに売れなくなる状況も生まれてきていた。

南北戦争後の不況下において開催されたコロンブス大陸発見四〇〇年記念万国博覧会においては、

「本博覧会本邦出品物の売行き予期の如く良好ならず為に渡航の諸協会組合員間に紛議を生じ延いては事務局の措置を非難し、又は同業者間の不和、本邦出品人の苦情等となり此空前の本邦賛同事業に対し汚点を印するが如き現象を呈するに至りたる」(註36)

といった状況に陥り、第五回パリ万国博覧会にいたっては、

「販売品の主なるものは絹織物、絹手巾、絹細工物、刺繍品、羽二重、陶磁器、金属器、象牙細工、玩具、漆器、木彫具、七宝器等にして販売総額仙貨十二万二千法を挙げ営業諸費、宣伝費、契約納付金等を控除し約五万法の損失を醸せり、残品は三百三十個に上り内九十個を巴里にて処分し二百

個は英米廻しとし四十個を本邦に返送し其結果は決して予期の如く良好ならざりし」(註37)

というように、日本の政府にとっても出品者にとっても万国博覧会での即売が期待できるものではなくなってきたのである。

五 おわりに

出品者たちは万国博覧会を、長期的視野に立っては江戸時代の大名諸侯に代わる新しい市場確保(欧米先進国の王侯貴族や資本家)への絶好の宣伝の場としてとらえるとともに、短期的視野に立っては美術工芸品制作事業のための回転資金を入手する場ととらえ、競って参加してきた。万国博覧会に出品されるような作品は、当時の一般的な日本人には高価すぎて購入できないものばかりであったからである。

しかし、四〇年におよぶ明治期の万国博覧会の歴史は、宮川香山や並河靖之のように芸術性を高めて名声を保ち続ける出品者と、名工と呼ばれつつも時間の流れに埋没していく出品者に分けていった。

だが、出品者の中には、自ら質的变化を遂げること(註38)によって明治期の万国博覧会を乗り切りつつ、長期的視野及び短期的視野に立って日本にとって重要な市場になりつつあった米國ボストンに支店を開設し(註39)、より安定した販売経路の確立を目指す西浦焼の西浦円治のような経営者も登場してきたのであった。

註及び参考文献

- 1: 『万国博覧会 技術文史的に』(吉田光邦 日本放送出版協会 昭和四五年)

『講座・日本技術の社会史4 窯業』(永原慶二・山口啓二 日本評論

- 社 昭和五九年)
- 『博覧会の政治学』(吉見俊哉 中公新書 平成四年)
- 2…前掲『万国博覧会 技術文明史的に』 三二頁
- 『図説万国博覧会史 一八五一〜一九四二』(吉田光邦編 思文閣出版 昭和六〇年) 一四三頁
- 『ガラスと文化 その東西交流』(由水常雄 日本放送出版協会 平成八年) 一四三〜一四四頁
- 前掲『博覧会の政治学』 三二〜三三頁
- 3…前掲『図説万国博覧会史 一八五一〜一九四二』 一四四頁
- 4…金・銀・瑠璃(るり)・玻璃(はり)・砵磔(しゃこ)・珊瑚(さんご)・瑪瑙(めのう)の七宝をちりばめたように美しいという意味がある。もともとは中国やオランダで制作されていたが、明治時代に入って確立された高度な技術から生まれてくる日本の七宝が欧米諸国に受け入れられ、ジャポニズムのきっかけの一つになった。
- 5…『海外博覧会本邦参同史料 第一輯』(博覧会倶楽部 復刻・平成九年) 四一頁
- 6…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第一輯』 四二頁
- 7…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第一輯』 五九頁
- 8…前掲『講座・日本技術の社会史 第四卷 窯業』 二二六頁
- 9…『多治見風土記』(加納陽治 窯業文化協会 昭和三十三年) 八三頁
- 10…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第一輯』 一〇五頁
- 11…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第一輯』 九二〜一〇三頁
- 12…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第二輯』 四三頁
- 13…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第二輯』 五三〜六九頁
- 14…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第二輯』 四七頁
- 15…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第二輯』 四七頁
- 16…『ジャポニスムからオール・ヌーヴォーへ』(由水常雄 中公文庫 平成五年) 五四〜五五頁
- 17…『岐阜県史 通史編 近代中』(岐阜県 昭和四五年) 八八四頁
- 18…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第二輯』 七九〜八〇頁
- 19…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第二輯』 八七頁
- 20…前掲『万国博覧会 技術文明史的に』 一〇一〜一〇三頁
- 21…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第四輯』 四〇〜四一頁
- 22…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第四輯』 四二頁
- 23…『茄子川焼』(中津川市教育委員会 昭和五八年) 一〇六頁
- 24…前掲『万国博覧会 技術文明史的に』 一一四〜一一六頁
- 25…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第四輯』 一一〇頁
- 26…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第四輯』 一一一頁
- 27…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第四輯』 一一一頁
- 28…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第四輯』 一二五〜一二六頁
- 29…前掲『ジャポニスムからオール・ヌーヴォーへ』 一一八頁
- 30…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第一輯』 八八〜八九頁
- 31…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第一輯』 八九〜九〇頁
- 32…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第一輯』 六四頁
- 33…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第一輯』 六六〜六七頁
- 34…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第二輯』 四五〜四六頁
- 35…図録『薩摩焼発祥四〇〇周年記念展 世界のさつま』(鹿児島県歴史資料センター黎明館 平成一〇年) 二〇頁
- 36…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第四輯』 四八頁
- 37…前掲『海外博覧会本邦参同史料 第四輯』 一二九頁
- 38…前掲『多治見風土記』 一一一〜一一六頁
- 39…『多治見市史 通史編 下』(多治見市 昭和六二年) 一三八五頁

表1 明治時代に開催された主な展覧会と日本の対応

○：万博の特徴及び性格

▽▼：日本の動向及び参加状況

■：国内の博覧会

開催年	主な出来事	開催地	備考
嘉永4年 (1851)		第1回英国ロンドン	<p>—全世界の工業の大博覧会— 入場者621万人</p> <p>○原料・機械・機械関係の発明・一般製造業の製品・彫刻と塑造の部門で構成された世界最初の国際的な博覧会となった。</p>
嘉永6年 (1853)	ペリー来航	米国ニューヨーク	入場者25万人
安政2年 (1855)		第1回仏国パリ	<p>入場者516万人</p> <p>○ナポレオン三世による「経済博」は、純粹芸術とそれを産業に適用した工芸を諸外国に誇示した。</p>
文久2年 (1862)	坂下門外の変 生麦事件	第2回英国ロンドン	<p>【万国工芸博】 入場者621万人</p> <p>▽初代駐日公使オールコックにより日本の美術品が展示された。</p> <p>▽新潟・兵庫開港の延期交渉のため渡欧した竹内下之守らが日本人として初めて万博を見学した。</p>
慶応3年 (1867)	大政奉還 王政復古の 号令	第2回仏国パリ	<p>入場者1100万人</p> <p>○産業中心から文化中心へと性格を転換し、産業の進歩を「美術と工芸」から捉えた。</p> <p>▼幕府が公式参加・茶室と日本館を設置</p> <p>▼薩摩藩と佐賀藩も工芸品を中心に出品</p> <p>▽日本に欧米の工業文明がすさまじい勢いで流入したのに対して、日本からは芸術（文化）が輸出され、それらが喜びをもって欧米に受け入れられた。</p> <p>▽福沢諭吉が『西洋事情』によって万博を紹介した。</p>
明治元年 (1868)		西国サラゴザ 仏国ルアーブル	
明治2年 (1869)		仏国パリ 和蘭アムステルダム 独逸アルトナ	

○：万博の特徴及び性格

▽▼：日本の動向及び参加状況

■：国内の博覧会

開催年	主な出来事	開催地	備考
明治3年 (1870)		英国ロンドン 伊国ナポリ 奥国グラーツ	
明治4年 (1871)	岩倉使節団 の欧米派遣	英国ケンシントン 米国サンフランシスコ	【工業博】 ▼東京府商工業者が連合参加 ■京都西本願寺で国内最初の博覧会開催
明治5年 (1872)		英国ケンシントン	■東京湯島聖堂で博覧会開催
明治6年 (1873)	岩倉使節団 の帰国	英国ケンシントン 奥国ウィーン	入場者722万人 ▼日本最初の公式万博参加・経費50万8千円 ・日本庭園の設置 ◎混迷を極めた工芸界に明るい兆しが生まれ、 陶芸界再出発のきっかけとなる。
明治7年 (1874)	佐賀の乱	英国ケンシントン 露国セントペテルブルグ	▼日本参加・経費9千円弱 【万国織物工業博】 ■第4回京都博覧会開催 ■金沢市で日本最初の地方博覧会開催
明治8年 (1875)	江華島事件	チリ・サンチャゴ チリ・バルパライソ 豪州メルボルン	
明治9年 (1876)		米国フィラデルフィア ベルギー・ブリュッセル	ーアメリカ独立百年万博博覧会ー 入場者1016万人（米国最初の成功博） ▼日本参加・経費36万円弱・日本館を設置 ■仙台市で宮城県博覧会開催 【回顧博】
明治10年 (1877)	西南戦争	仏国リヨン	【回顧博】 ■第1回国内勸業博覧会開催（東京上野）
明治11年 (1878)		第3回仏国パリ	入場者1610万人 ○普仏戦争の敗北からの立直りと仏国の文化的 地位向上をねらって開催した。 ○ヨーロッパの工芸品のジャポニズムの傾向が 強まってきた。 ▼日本参加・経費21万3千円

○：万博の特徴及び性格

▽▼：日本の動向及び参加状況

■：国内の博覧会

開催年	主な出来事	開催地	備考
明治12年 (1879)		和蘭アルンヘム 豪州シドニー	○欧州大陸及び亜米利加大陸以外で初めて開催される万博となった。 ▼日本参加・経費3万9千円
明治13年 (1880)		豪州メルボルン 独逸ベルリン	▼日本参加・経費3万8千円 【万博漁業博】
明治14年 (1881)		ベルギー・リエージュ 米国アトランタ 独逸ミュンヘン	【万博綿業博】 ▼日本参加 【鉦泉学博】 ▼日本参加 ■第2回内国勸業博覧会開催（東京上野）
明治15年 (1882)		アルゼンチン・ブエノスアイレス チリ・サンチャゴ 奥国トリエスト	【内国工業博】 ▼日本参加・経費4百円
明治16年 (1883)		仏国ニース 奥国ウィーン 独逸ミュンヘン 和蘭アムステルダム 米国ボストン 英国ロンドン	【植民地産物一般輸出品博】 ▼日本参加・経費2万円 【技術工業博】 【万博漁業博】 ▼日本参加・経費2千円 ■水産博覧会開催（東京上野）
明治17年 (1884)		印度カルカッタ チリ・サンチャゴ 米国ニューオリンズ 英国ロンドン 露国セントペテルブルグ 英国エジンバラ	【万博工業博】 ▼日本参加・経費1万5千円 【万博衛生博】 ▼日本参加・経費2万4千円 【万博園芸博】 ▼日本参加・経費1万円 【万博森林博】 ▼日本参加・経費1万9千円
明治18年 (1885)		ハンガリー・ブタペスト 西国サラサゴ・マドリード ベルギー・アントワープ 南ア・ポートエリザベス ウルグアイ・モンテヴィデオ 英国ロンドン 独逸ニュールンベルグ	【万博発明品博】 ▼日本参加・経費2万7千円 【万博金工博】 ▼日本参加・経費3万3千円

○：万博の特徴及び性格

▽▼：日本の動向及び参加状況

■：国内の博覧会

開催年	主な出来事	開催地	備考
明治19年 (1886)	ノルマントン 号事件	英国ロンドン・リバプ ール・エジンバラ ベルギー・アントワープ	
明治20年 (1887)		ニュージーランド・アデレード 印度ボンベイ 英国マンチェスター カナダ・ケベック	
明治21年 (1888)		英国グラスゴー デンマーク・コペンハーゲン ギリシャ・オリンピア ベルギー・ブリュッセル 豪州メルボルン 西国バルセロナ	▼日本参加・経費2万3千円
明治22年 (1889)		ニュージーランド・ダニージン 独逸ハンブルグ 第4回仏国パリ	—フランス革命百年記念— 入場者3235万人 ○各国の学者による各種国際会議が開催された。 ▼日本参加・経費13万円：列強間には不参加の 気運
明治23年 (1890)		英国エジンバラ 露国セントペテルブルグ 独逸ハンブルグ	【万国監獄博】 ▼日本参加・経費5千円 【商業博】 ▼日本参加・経費5千円 ■第3回内国勸業博覧会開催（東京上野）
明治24年 (1891)		露国モスクワ 独逸フランクフルト・ベルリン	
明治25年 (1892)		スイス・ジュネーブ	
明治26年 (1893)		米国シカゴ	—コロンブス大陸発見四百年記念— 入場者2753万人 ▼日本参加・経費63万円・宇治平等院鳳凰堂の 特設館と日本館を設置

○：万博の特徴及び性格

▽▼：日本の動向及び参加状況

■：国内の博覧会

開催年	主な出来事	開催地	備考
明治27年 (1894)	日清戦争	米国サンフランシスコ 西国マドリッド 仏国リヨン ベルギー・アントワープ	
明治28年 (1895)	三国干渉	和蘭アムステルダム 米国アトランタ 露国オデッサ	■第4回内国勸業博覧会開催（京都）
明治29年 (1896)		暹国インスブルグ メキシコ	
明治30年 (1897)		ベルギー・ブリュッセル グアテマラ エルサルバドル	【中央アメリカ博】 【中央アメリカ共和国博】
明治33年 (1900)		第5回仏国パリ	－19世紀万博の総決算と20世紀万博の方向－ 入場者4707万人 ○ナショナリズムの昂揚を受け、各国が独自の館を建てて自国の文明と文化を紹介した。 ○アール・ヌーヴォーが開花した。 ▼日本参加・経費131万5千円 ◎日本の出品物に対して厳しい審査・批判が集中し、意匠改良の気運が一気に高まる。 ◎同万博で学んだ近代的生産方法によって、陶磁器業界は新たな発展の機会を入手する。
明治34年 (1901)		英国グラスゴー 米国バッファロー	▼日本参加・経費4万円 【汎アメリカ博】
明治35年 (1902)	日英同盟調印	伊国トリノ 仏領インドシナ・ハノイ	【フランス及び仏領植民地・極東の産業博】
明治36年 (1903)			■第5回内国勸業博覧会開催（大阪）
明治37年 (1904)	日露戦争	米国セントルイス	－ルイジアナ州購入百年記念－ ▼日本参加・経費82万2千円・藤原時代の寝殿造り 日本は参加（世界が好感をいだく）したが、ロシアは日露戦争を理由に不参加

開催年	主な出来事	開催地	備考
明治38年 (1905)		米国ポートランド ベルギー・リエージュ	—オレゴン州探検百年記念— ▼日本参加・経費3万円 —ベルギー独立七五周年記念— ▼日本参加・経費400万円
明治39年 (1906)		伊国ミラノ	【サンブロン隧道開通運輸工業万博】 ▼日本参加(水産関係の出品)・経費1万5千円
明治40年 (1907)		米国ジェームスタウン	—英語民族上陸三百年記念— ▼日本参加・経費1万5千円
明治41年 (1908)		露国モスクワ 英国ロンドン 露国ペテルブルグ	【仏英博】 【万国装飾技術及び家具博】 ▼日本参加・経費3万円
明治42年 (1909)		米国シアトル	—アラスカ・ユーコン地方購入記念— ▼日本参加・経費8万8千円
明治43年 (1910)	日韓併合	英国ロンドン	【日英博 —日英同盟記念—】 ▽経費208万円で日本が企画・共同経営 ◎日本の古美術に対する関心が高騰し、新しい工芸品には注意が払われない。 ▽売れ残りを集めてブタペストで展覧会を開催した。
明治44年 (1911)		伊国ローマ・トリノ	【万国工業大博】 ▼日本参加・経費15万2千円
明治45年 (1912)		独逸ドレスデン デンマーク・コペンハーゲン	【万国発動機博】 ▼日本参加・政府補助260円

【参考文献】

『海外博覧会本邦賛同史料』（博覧会倶楽部 昭和9年）

『万国博物語』（浜口隆一・山口広 鹿島研究所出版会 昭和41年）

『日本の美術 No41 明治の工芸』（中川千咲 至文堂 昭和44年）

『図説万国博覧会史 1851—1942』（吉田光邦 思文閣出版 昭和60年）

『ジャポニスムからアール・ヌーヴォーへ』（由水常雄 中央公論社 平成5年）

『ガラスと文化 その東西交流』（由水常雄 日本放送出版協会 平成8年）

『博覧会の政治学』（吉見俊哉 中公新書 平成4年）